

NEWSLETTER #112

p.1	2017年第1回関東地区例会報告.....	齋藤 宗昭
p.3	2017年第1回関西地区例会報告.....	福永 健一、藤下 由香里
p.6	会員の OUTPUT	
information		
p.6	事務局より	

2017年第1回関東地区例会報告

齋藤宗昭

日時:2017年3月11日 土曜日 14:00~17:00

於:大東文化大学板橋キャンパス 3号館3-1034教室

プログラム1:修士論文報告会

報告者:中野哲(東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学
専攻芸術環境創造領域修士課程)

報告者:紺野泰洋(早稲田大学大学院教育学研究科修士課程)

プログラム2:講演

講演者:Kevin Fellezs(コロンビア大学准教授)

司会:井上貴子(大東文化大学)

1.「東京ライブハウス文化の転換と再構築 一中規模店舗のブッキングイベントを事例に」

中野哲(東京藝術大学大学院音楽研究科音楽文化学専攻
専攻芸術環境創造領域修士課程)

本発表は、音楽業界の「底」であり、「最先端」である、現在のライブハウス文化の様相を探り、その意味を考えるとというものであった。

1970年代から現在までのライブハウスシーンの歴史を整理しながら、実際に都内の4つの中規模ライブ

ハウスのブッキングマネージャーへのインタビュー調査を行うことで、90年代以降、ライブハウスの「場所」としての性質に変化があったことが示された。バンドブームを通過した90年代以降、ライブハウスはかつてのアンダーグラウンドな性質を失い、2000年代にはインターネットの普及に伴い情報の場としての価値も低下した。それゆえライブハウスは、次第にサービスを重視する方向に傾いていき、健全な娯楽施設として運営されるようになっていったことが明らかにされた。その内容は例えば、施設内を清潔にする、クラブ風ホールの設置、音響設備の充実等であるが、各ライブハウスで少しずつ異なっているとのことであった。

結論として、ライブハウス文化は外部に対し閉じた文化ではなく、社会からの影響を必ず受ける、流動的な文化であり、とくに一人ひとりの価値観、生きざま、感情がイベントの開催に影響を及ぼす文化であるとされた。その一方で、サービス指向の運営がライブハウスをより信頼性のある場所へと変えたが、現場の人たちの自由や個性を制約してしまわないような、バランスの難しさがあることも合わせて指摘された。

この報告の価値は、中野氏自身のバンド活動を通じた経験、フィールドワークの成果であることである。

一方欠点は、客がライブハウスをどのように評価してきたのかについての分析がなかった点であろう。フロアからは、ライブハウスの歴史についての捉え方の精度の粗さ、地方のライブハウスとの比較の必要性について指摘があった。

2. 『繋がり』のライブハウス——東北ライブハウス大作戦と大船渡LIVEHOUSE FREAKSをめぐって」

紺野泰洋(早稲田大学大学院教育学研究科修士課程)

本発表は、東日本大震災被災地への「支援」として、被災した3つの市にライブハウスを建設するプロジェクト「東北ライブ大作戦」と、岩手県大船渡市に建設されたライブハウス、大船渡LIVE HOUSE FREAKSについて、建設地域の人々の視点から論じるといったものであった。

紺野氏は実際に、それらのプロジェクトにスタッフとして参加し、その地域の人々への調査を行った。その中で、これまで絆、復興、希望といった言葉で語られてきた震災後の音楽による被災地支援の動きが、実は地域の人々にとってライブハウス経営のむずかしさ、つらさ、ひどさに直面するものであったことを明らかにした。そして発展的な議論としてなぜ彼らは私生活を犠牲にしてまでそれをするのか、という問いを投げかけた。その結果、それが地域への「情熱」にもとづいて行われた、音楽に携わる人々の「役割」の表現であった点であることが示された。

結論として、地域の人たちが、ライブハウスの運営を通して相互の社会的な「繋がり」を維持しようとしているとされた。それは当該集団内での結束型の社会関係資本の獲得、それを媒介とした地域内外での社会的ネットワークの形成のためであるとされた。また被支援者の視点からこうした支援の動きを捉えることの必要性が合わせて指摘された。

この報告は、紺野氏自身が東北地方の出身であり、スタッフとしてそこに関わったことで、被災地域の人々が音楽による支援活動をどのように捉えていたのかを明らかにできた点で、非常に価値があると言える。しかし一方で、ライブハウスに来る一般の客がそれをどのように受け止めていたのかについ

て、詳しい分析がなかったことは、欠点であろう。フロアからも同様に、客に対する分析の必要性について指摘があった。その際、とくに客同士の社会的「繋がり」への視点が強調された。

3. “My Island of Golden Dreams: Japanese Americans Performing Hawaiian Music in Japan” Kevin Fellezs (コロンビア大学准教授)

この講演は、1920年代から2010年代までの、日系アメリカ人と日本人の日本でのハワイアンミュージックの演奏についてのものであった。ハワイアンミュージックを演奏する日本人ギタリストが、“aloha”(love, welcome) や、“kuleana”(responsibility) のようなハワイアンの価値観を表現する方法について考察が行われた。山内雄喜、アグネス木村、スラックキー・マーティ、3人の日本人ギタリストの例から、彼らがそのためにハワイの文化に実際にアクセスし、演奏することを選択したことが示された。一方、日本人ギタリストたちの表現は、実際のハワイアンミュージックとは異なる面もあるとのことであった。もともとハワイアンミュージックはハワイ文化の再生と、社会正義の運動と密接に結びついており、あらゆるアーティストが表現の中でそれを提示するが、日本人ミュージシャンの場合はそうではないとされた。しかし、日本人のミュージシャンは少なくとも80年以上、ハワイアンミュージックを演奏してきており、こうした長期間の横断的な文化活動が、単なる流用というよりもむしろ、ハワイと日本の間の真の協調の可能性とはならないだろうかとの指摘もなされた。

私は、ハワイアンミュージックについて、これまで特に興味を持って調べたことはなかったが、この講演はとても新鮮に感じた。話の中で、ハワイアンミュージックにおいて使用される楽器は主に、スラックキーギター（オープンGチューニングのギター）であるとの説明があった。ハワイアンミュージックはウクレレを用いて演奏するという先入観があった上、自分自身ギターを演奏することもあり、驚きとともに実際はどのような音楽をハワイアンミュ

ージックと呼ぶのか、またそれがどのように演奏されているのかについて興味を引かれたためである。

以上が例会の報告である。中野、紺野両氏の報告は詳細なフィールドワークの成果である点で、Fellezs氏の講演は日本のポピュラー音楽の動向を外国人の視点から分析していた点で、どれも刺激的であった。本例会は、研究を行う上での原点とも言える、実際に現場に足を運んで調査をすることや、外部からの客観的視点を持つことの重要性を、改めて感じさせる機会であったと言えよう。

(齋藤宗昭 関西大学大学院社会学研究科博士後期課程)

2017年第1回関西地区例会報告

福永健一、藤下由香里

日時:2017年3月24日(金)13:30~18:00

於:関西大学 千里山キャンパス 第3学舎 A305教室

卒業論文・修士論文・博士論文報告会

卒業論文報告者:

浅卷祐真(京都文教大学総合社会学部)

若宮花瑛(大阪市立大学文学部)

楠本美法(関西大学社会学部)

修士論文報告者:

中野太郎(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

吉村汐七(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

博士論文報告者:

田邊健太郎(立命館大学大学院生存学研究センター客員研究員)

1.「オーディオ広告に見る『良い音』観の系譜」(卒業論文)

浅卷祐真(京都文教大学総合社会学部)

本報告は1950年代から現在に至るまでのオーディオマニアが持っていた「良い音」観の変遷を、音楽之友社『レコード芸術』第1号(1952年1月号)から第785号(2016年2月号)に掲載されているスピーカー広告のキャッチコピーを「音質」と「感性」に分類し明らかにするものであった。分析結果の例として「音質」については、50~60年代から現在まで「高忠実度再生」という文言が最も多いが、80年代からは減少傾向が見られ、相対的に波形で音質向上を謳うといった「技術

特性」に関する文言が増加していくなどの変化が見られた。こうした調査を通して明らかになったのは、オーディオ趣味とは装置ごとの音の違いを楽しむことであり、それゆえにオーディオ趣味には終わりがないのであるという、オーディオマニアの文化史の一端である。フロアからは、音質だけでなく、形状などの変化についても検討すればより厚みのある歴史が描けるのではないか、といったコメントがあった。

2.「パチンコとアドルノ」(卒業論文)

若宮花瑛(大阪市立大学文学部)

本報告は大衆文化としてのパチンコを、アドルノ理論に基づいて検討するものであった。パチンコの歴史を規制と音楽に注目して整理し、現在のパチンコ業界と音楽業界の相互に依存した関係を明らかにした上で、アドルノのポピュラー音楽批判の見地からの検討によって、パチンコが文化研究の対象とならない要因を明らかにするものであった。80年の歴史を持つパチンコは、幾多の規制を受けながら発展し、1992年からテレビ番組とのタイアップが始まり、近年はアニメやゲームとのタイアップが増加している。音楽に着目すれば、パチンコ台から流れるタイアップの音楽が、ヒットに繋がらずとも受賞している状況がある。アドルノは、商品化する音楽を憂えたが、パチンコにおける音楽は、もはや商品ですらなく、演出や景品、騒音としての機能しか持ちえない。パチンコホールには、音楽を再生する台とそれを受動的に聞く打ち手しか存在せず、文化研究の対象とはなりえない。フロアからは、ギャンブルもパチンコも文化研究として蓄積があるため、文化研究の対象となり「えない」というよりなり「にくい」のであって、それを今後いかに研究するかを考究するのが課題ではないか、といったコメントがあった。

3.「甲子園に広がるプロ野球応援歌—千葉ロッテマリーンズの応援が人気のワケ」(卒業論文)

楠本美法(関西大学社会学部)

近年、高校野球の応援歌のなかで使用されるプロ野球の応援歌には、千葉ロッテマリーンズのものが多い。本報告はこの現象をプロ野球の応援のあり方の変化

やインターネットの普及という視点から明らかにするものであった。高校野球ではかつて、校歌や応援歌を歌い拍手と声援で盛り上げる「硬派な」スタイルが主流であったが、応援団同士のトラブルを発端に、曲に合わせてコールするという現在のスタイルへと変化した。このスタイルはプロ野球の応援スタイルにも影響を与えてきたが、現在はそれが逆転している。とくに千葉ロッテマリーンズの手拍子や声援を用いたスタイルがインターネット上で好評を博し、高校野球の応援曲に中にもマリーンズの応援曲が使用され流ようになった。フロアからは、研究方法がインタビュー中心だが、なぜマリーンズの応援スタイルが採用されたのかについて、他球団との応援スタイルの比較などを行うべきでないかといったコメントがあった。

(福永健一)

4.「ロック文化におけるモッシュ行為の研究—理念と実践、個人と集団」(修士論文)

中野太郎(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

中野氏はロック文化においてステージに背を向け、音楽に集中せず、時に暴力的にふるまうモッシュ行為の分析を行う中で、パフォーマンスの場における観客の参与に注目し、ロック文化におけるライブ空間を再考し、ライブ研究に新たな視座を示そうと試みた。

まず中野氏からは、モッシュに至る観客のふるまいの系譜が提示された。モッシュの系譜は1970年代半ば以降のポゴダンスまで辿ることが出来る。そしてスラムダンスを経て1985年前後のニューヨークのハードコアシーンでのモッシュに至る。1960年代半ば～1970年代初期のロック文化では、表現主義的なロックミュージックの傾向により「鑑賞」という聴取の形態が生まれる。それに対し、1990年頃からロック文化にモッシュが根付き、観客の参与が伴う聴取の形態が生まれた。中野氏は、このようなロック文化の歴史の中で、モッシュ行為は音楽を提示する側と享受する側の立ち位置を相対化するふるまいとして位置付けられるとしながらも、「鑑賞」を客体的、「モッシュ」を主体的なふるまいとして短絡的に位置づけていいのかという疑問も投げかけた。その疑問点の解決の糸口として、中野氏はフィールドワーク調査から明らかに

なったモッシュ実践の事例を挙げた。モッシュ・オーガナイザー、モッシュの動機、スタイル、アティテュードなどの事例から明らかとなったのは、モッシュには自発型と連動型の実践があるということである。またその実践に対し、音楽への思い入れ、行為の本気度、イレギュラー性の理念も存在している。中野氏は、個人がこれらの理念をある程度意識しながら、全体として調和が図られると結論付けた。

質疑応答では、実際にモッシュの現場に居合わせた経験者からのコメントもあり、とても積極的な意見交換がなされていた。モッシュに関わる人間は誰なのか、ジェンダーの問題、そしてこのようなライブ空間の変容はロック文化に留まらないのではないかという質問も出された。中野氏は今回モッシュ行為を研究するにあたり、ロックミュージックに関する議論を援用して問題の枠組みを設定したと述べていた。モッシュ行為をロック文化のものだと限定せず、同時に他の音楽ジャンルにも目を向けた時、ライブ空間と観客の関係性は更に細分化して捉え直すことも出来そうである。今後、さらに深く掘り下げた議論を期待したい。

5.「現代におけるライブパフォーマンスの変容に関する研究—応援上映と初音ミクのライブを事例に」(修士論文)

吉村汐七(大阪大学大学院文学研究科博士前期課程)

続く吉村氏の修士論文発表もライブに関するものである。吉村氏は初音ミクや「KING OF PRISM by Pretty Rhythm」(以下「キンプリ」)といったオタク文化と密接に繋がった架空のキャラクターによるライブを例に挙げ、「聴く」ことから「体験する」ことへの移行というライブ概念の変容と聴衆の在り方に着目し、これらの事例をライブの系譜に位置付け、現代のライブパフォーマンスについての考察を行っていた。

まず初めに、ライブパフォーマンス概念とその歴史の再確認が行われた。ライブの概念は「録音や録音されたもの」の対立概念として成立した。多くの人々が実際のライブパフォーマンスにライブの真正性を認識しており、観客はパフォーマーとの親密感を味わう身体的な近密性を重視している。また技術的・空間的な変遷として、近年では人間がバーチャルな世界に近

づくライブやインターネットのライブストリーミングサービスが見られるという。

続いて吉村氏は具体的な事例を挙げた。まずは「キンプリ」である。「キンプリ」とはTVアニメ「プリティーリズム」のスピノフ映画作品である。「キンプリ」の特徴は「観客参加型上映」であることで「応援上映」とも呼ばれる。応援上映中、サイリウムの使用はもちろん、声援、応援、セリフのアフレコが許可され、応援を介して観客同士のコミュニケーションもとられている。劇場側も応援上映に来た観客がより楽しめる配慮をしているということで、吉村氏は「キンプリ」の応援上映では、作品と観客・観客同士・劇場と観客の3つのやり取りの視点があると指摘した。

次の事例は初音ミクのライブである。初音ミクは2007年に発売されたDTMソフトウェアである。今日ではそのキャラクターと楽曲を用いたライブが行われている。ライブ中、初音ミクは透過（もしくはマルチ）スクリーンに映し出され、バンドの生演奏にのせて歌い、踊る。観客は初音ミクのその姿に強い実在感を感じるという。

以上の事例から吉村氏は従来のライブ・初音ミクのライブ・「キンプリ」応援上映を身体性・再帰性・参加性・コミュニケーション性の視点から、それぞれの特徴と相違点を述べた。そして現代におけるリアルとバーチャルが混じり合った環境が受け手を成長させ、その受け手が作り手に影響を与え、ライブの実態を変容させる可能性があるという結論付けた。以上の発表に対し、フロアからは「従来のライブ」の捉え方の問題や、録音技術の対立概念の重要性、サイレント映画の弁士との関連性といった様々な意見が出されていた。そこからは、ライブ研究の視座として、他のメディア研究との比較検討や、それらに関わるファンの行動に着目することの重要性が浮かび上がってきたように思う。

6.「音楽を存在論的に理解すること—音楽実践の分析と形而上学は(どのように)結びつくか」

田邊健太郎(立命館大学大学院生存学研究中心—客員研究員)

田邊氏は分析美学において論じられている音楽の存在論、「基礎的存在論者の論争」と「比較存在論」を

これまで論じられてきたものとは異なった視座からそれらを概観する発表を行った。田邊氏はそれらを概観する視座として「直観・音楽実践の分析」、「形而上学的考察」、「方法論的考察」を提案した。

まず「基礎的論争」の進行について、代表論者のジェロルド・レヴィンソンの議論の枠組みが整理された。「基礎的論争」ではまず「直観」や「音楽実践」と呼ばれるものが分析され、次にそれまで暗黙の裡に前提されていた直観を明示し、音楽実践の分析を美学的観点から行い、そして形而上学的考察へ進むという。また「直観・音楽実践の分析」をどのように行うべきか、分析結果をいかに扱うかという問題を検討する「方法論的考察」については、レヴィンソンが考察の為に新しい存在論カテゴリーを作り出した時に、直観・音楽実践の分析を十分に反映させることと形而上学的長所にかい離が生じる事態が生じた。その事態に対し、形而上学的考察に対する「記述的形而上学」と「修正的形而上学」の区別をアンドリュー・カニアが行ったという。田邊氏は存在論を見る際にこのような区別が導入されていたという事実が本発表のポイントであると述べた。そして「基礎的論争」で「直観・音楽実践の分析」に対する既存の立場への批判を行い、音楽作品の「投影主義」という形而上学的立場の提唱を行ったリディア・ゲーアの貢献についても説明がなされた。

次に田邊氏は、ポピュラー音楽についての存在論がどのような構造をもつのか、前述の視点から分析を行った。ポピュラー音楽を存在論的に考える際にも「作品とは何か」という問いが立てられるが、ポピュラー音楽の場合、「直観・音楽実践の分析」内でとどまっているか、形而上学的に示唆を与えるのみで、実践の分析から形而上学へと辿る論者が少ないという。しかしながら、日本国内におけるポピュラー音楽の存在論の論争では、形而上学的考察も議論内に含まれていることも田邊氏は指摘した。

以上の発表を受け、フロアでは今回の発表の構図の再確認や、録音物と生演奏についての議論など、積極的な質疑応答が行われていた。田邊氏の発表は、日本ポピュラー音楽学会においても継続的に行われているポピュラー音楽についての存在論の議論を客観的

な視点から俯瞰する意味でも意義あるものだったと感じる。より多面的な視点からのポピュラー音楽の存在論の更なる分析・検討を待ちたい。

(藤下由香里 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程)

会員のOUTPUT

伊藤雅光・著

『Jポップの日本語研究 - 創作型人工知能のために』
(朝倉書店、2017年5月)

判型・ページ数：A5・216頁

ISBN：ISBN978-4-254-51054-6

定価：3,456円(税込)

※JASPM学会員に限り15%の割引があるそうです。

詳しくはJASPMメールニュース(2017.6.13付け
No.327)をご確認ください。

◆information◆

事務局より

1. 学会誌バックナンバー無料配布について

現在、JASPM 学会誌『ポピュラー音楽研究』Vol.1～Vol.11のバックナンバーは、そのすべての記事が、科学技術振興機構のオンラインサービス、J-STAGEにおきまして無料で公開されております。

(<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jaspm/pms1997/-char/ja>)

そのため、事務局に所在するVol.11までの冊子体のバックナンバーを、希望者の方に無料で配布しております(ただし送料はご負担いただきます)。

在庫については学会ウェブサイトの「刊行物」のコーナーに随時記載しておりますので、配布を希望される方(非学会員の方でも結構です)は事務局にお問い合わせください。また、ネット上で内容が全文公開されていないVol.12以降のバックナンバーについては、引き続き通常の販売

を行い、無料配布の対象とはいたしません。ご注意ください。

2. 原稿募集

JASPM ニュースレターは、会員からの自発的な寄稿を中心に構成しています。何らかのかたちで JASPM の活動やポピュラー音楽研究にかかわるものであれば歓迎します。字数の厳密な規定はありませんが、紙面の制約から 1000 字から 3000 字程度が望ましいです。ただし、原稿料はありません。

また、自著論文・著書など、会員の皆さんのアウトプットについてもお知らせ下さい。紙面で随時告知します。こちらはポピュラー音楽研究に限定しません。いずれも編集担当の判断で適当に削ることがありますのであらかじめご承知おきください。

ニュースレターは学会ウェブサイト掲載のPDFで年3回(2月、5月、11月)の刊行、紙面で年1回(8月)の刊行となっております。住所変更等、会員の動静に関する情報は、紙面で発行される号にのみ掲載され、インターネット上で公開されることはありません。PDFで発行されたニュースレターはJASPMウェブサイトのニュースレターのページに掲載されています。

(<http://www.jaspm.jp/newsletter.html>)

8月の紙媒体での発行号については、会員の動静に関する個人情報を削除したものを、他の号と同様にPDFにより掲載しております。次号(113号)は2017年8月発行予定です。原稿締切は2017年7月20日とします。また次々号(114号)は2017年11月発行予定です。原稿締切は2016年10月20日とします。

投稿原稿の送り先はJASPM 広報ニュースレター担当(n1@jaspm.jp)ですので、お間違えなきようご注意ください。ニュースレター編集に関する連絡も上記にお願いいたします。

3. 住所・所属の変更届と退会について

住所や所属、およびメールアドレスに変更が

あった場合、また退会届は、できるだけ早く学会事務局 (jimu@jaspm.jp) まで郵便またはEメールでお知らせください。ご連絡がない場合、学会誌や郵便物がお手元に届かないなどのご迷惑をおかけするおそれがございます。例会などのお知らせはEメールにて行なっております。メールアドレスの変更についても、速やかなご連絡を事務局までお願いいたします。

4. 会費請求と会員のメールアドレス問い合わせについて

2017年3月に、2017年度の会費請求書類を、学会誌 Vol. 20 (2016) と一緒に会員の皆様のお手元にお届けしました。学会誌は2016年度の会費納入者にお送りしておりますので、学会誌が同封されていない場合は、速やかに会費を納入いただきますようお願いいたします(会費納入後速やかに会誌を送付いたします)。

なお、会員の皆様には、電子メールにて随時、学会からのお知らせ「JASPM メールニュース」をお送りしておりますが、最近、メールが不着となる会員の方が増えております。そのため、会費請求書類とあわせて、会員の皆様に最新のメールアドレスの問い合わせに関する書類を同封しております。メールニュースが届いておられない会員の皆様につきましては、ご留意の上ご回答いただきましたら幸いです。

JASPM NEWSLETTER 第112号

(vol. 29 no.2)

2017年7月3日発行

発行：日本ポピュラー音楽学会 (JASPM)

会長 小川博司

理事 青木深・井手口彰典・井上貴子・大和田俊之・川本聡胤・谷口文和・増田聡・安田昌弘・山崎晶

学会事務局：

〒606-8588

京都市左京区岩倉木野町137

京都精華大学

安田昌弘研究室内

jimu@jaspm.jp (事務一般)

nl@jaspm.jp (ニューズレター関係)

http://www.jaspm.jp

振替：

00160-3-412057 日本ポピュラー音楽学会

編集：平石貴士